

社会から排除されることがある。タバコへの嫌悪はすさまじい。「入墨もそうなのか」と気づいたのは最近だ。床屋で世間話に興じているうち、町内会の運営にもたずさわる店主から、「あらゆる公共空間で入墨は「ご法度」と聞かされた。祭礼や銭湯はもちろん、プールもダメだぞうだ。子ども連れの若い母親が、肩に入れたタトゥーを咎められ、入場できないケースもあるらしい。母親が〈若気のいたり〉を反省する場面だ。

高校時代、剣道部だった。夏休みの合宿では学校に寝泊まりし、入浴は銭湯に行った。そこには、入墨を背負った男性が当たり前のようだった。湯温を水で下げようとして、

入墨の主から叱られた記憶もある。体内に染みこんだ顔料のせいで身体が冷えるらしい。山本作兵衛の描く、ユネスコ世界記憶遺産に登録された筑豊炭坑記録画でも、坑道を這う男たちは入墨をまといている。からだを張って働く者の多くが入墨を負う時代だった。

最近の浴場でも、みごとに入墨を見た経験がある。四年ほど前、正月に伊勢神宮を訪れた際だ。宿泊予約がなかなかとれず、街の中心部から外れたビジネスホテルに宿をとった。大浴場があると聞き、脱衣して風呂場の扉を開けて驚いた。印象としては、十体ほどの俱利伽羅紋紋

が目飛びこんできた。入墨の男性たちが思い思いに入浴し体軀を洗っていた。風呂から部屋にもどり、頭を冷まして考えた。彼らは、伊勢神宮の参道に店を出す露天商、テキヤと呼ばれる職業の人びとだったのではないか。

先日、妻の実家のある富士吉田市に帰ったおり、義弟たちと、日本三奇祭と言われる「吉田の火祭り」の話題になった。富士山ブームの昨今、祭りの人出もすごいのでは、と尋ねると、「そうでもない」との答えが返ってくる。理由は、祭礼会場からテキヤを排除し、露店などを激減

夜店が消えていく

させたせいと言う。自治体やボランティアが数少ない屋台を営むらしいが、夜店の妖しさは出ない。床屋の店主も、テキヤ排除の事情は神楽坂も同様だと話す。入墨排斥が、いつのまにか露店駆逐にまでおよんでいた。

テキヤは、もとは香具師と言われ、その「やし」は薬師からの転訛との説がある。その説に拠るならば、もとは漢方薬などを売っていたのではない。フーテンの寅はテキヤである。「テキヤのなかにはヤクザに近い人物がいる」との理由で、業態のちがうテキヤ全体が排除されるというわけだ。床屋の店主は、「グレーゾーンが

あるかぎり、不公平を避けるため、一律排除となってしまう」と語る。ただし、寺院や神社の境内は、寺社の判断で、露店を認めるばあいもあるそうだ。歴史学者・網野善彦が記す『無縁・公界・楽』のもつていた中世的自由さが、縁日の境内にはかすかに受け継がれているのかもしれない。伊勢神宮は露店の営業を許し、それにともない、ホテルの大浴場も入墨の入浴に目くじらを立てない、そう推測する。

ひとはなぜ、入墨という身体変工をするのだろうか。自己顕示のほかに、紋様の力による魔除けの意味もあるだろう。

さきごろ近未来小説で、身分証明のために入墨を入れているテロリストの物語を読んだ。身分は隠したいが、自分が死んだことを何人かには知らせたい。特定の図

柄がそれを伝える。「からだを張る」とは、危険と隣り合わせで働くことだろう。事故が起きたとしても、炭坑夫の刺青は身元を明らかにするはずだ。身分証明書によってではなく、自身の身体によって自身を証したい、入墨にはそんな欲望が潜んでいるのではない。ならば入墨は、自身の死を基点とした生きかたを迫るはずだ。現在を謳歌するのではなく、現在を死のがわから見るのだ。《現在》を否定しかねない入墨を、消費社会は忌避している。

(すずき・ひとし／ブック・デザイナー、題字デザインも筆者)

連載エッセイ 第37回

鈴木一誌